

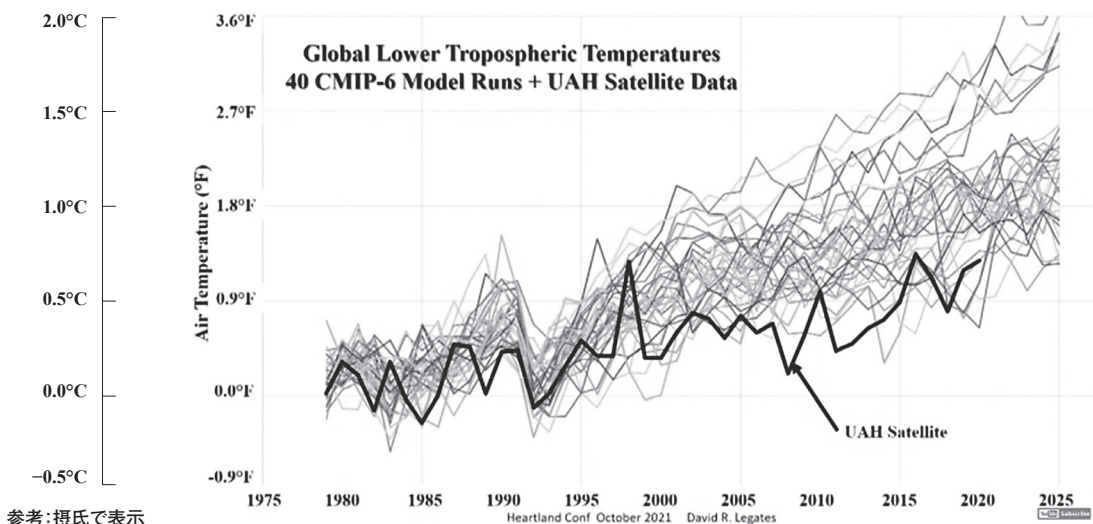
過去の再現が出来ない気候モデル

杉山 大志 (すぎやま たいし) 一般財団法人キャノングローバル戦略研究所 研究主幹

要旨 「気候危機説」はシミュレーション計算によるモデルの予測に頼っている。しかし、これらのモデルは、過去の観測もろくに再現できていない。モデルの多くは温暖化しすぎの傾向にある。それにも関わらず、このようなモデルに基づいた予測が出回っており、政策決定のために用いられている。

1. 大気気温上昇

図1は、2021年のIPCC報告で使用された気候モデル（“CMIP6 Model”）の計算結果（複数の細線 \equiv ）を、衛星観測（アラバマ大学、UAH、太線 — ）と比較したもの。比較対象は、地球全体の、上空9000メートル以下の対流圏の気温である。



参考:摂氏で表示

図1 大気気温上昇。モデルの計算値（ \equiv ）と衛星観測（ — ）の比較。

縦軸の気温は華氏で表示されているが、図中の1.8°Fは1°Cのことである。

なお気温上昇量を比較するため、どの折れ線グラフも、その回帰直線が1979年にゼロ°Fになるように上下にずらしてある。

図から一目瞭然、殆どのモデルは、観測値よりも熱くなり過ぎている。

2016年から2020年にかけては、大きなエルニーニョが来て気温が高くなったにも関わらず、である。

過去についてこれだけ外れていたなら、その将来予測は取り下げるべきではないか？ だがIPCC報告はそうしてはならず、将来予測はそのまま掲載している。

出典: Legate's presentation Heartland 14th Climate Conference Las Vegas 15 October 2021